

幼児期(3歳児・4歳児・5歳児)の活動を通じた思考に関する一考察

— 絵本を使った調査を中心に —

原 麻美子・谷内 ますみ

A study on thinking through activities in early childhood (3-year-old, 4-year-old, and 5-year-old children) ～ Focusing on research using picture books ～

Mamiko HARA・Masumi TANIUCHI

Abstract

Children (3-year-olds, 4-year-olds, and 5-year-olds) compared two scenes from the same picture book to see what kind of images they had of them. We discovered the difference in what happened there, and investigated and considered the utterances we inferred. Three-year-olds were seen trying to express and convey their feelings in words, and four-year-olds were seen listening to what their friends were saying and trying to convey their own feelings to those words. The 5-year-olds were seen thinking more deeply, making inferences based on experience, learning what their friends were thinking, and sharing ideas that differed from their own. This is thought to be an experience in the budding of thinking for children, so it was found that the influence of other children on their thinking is also large. Based on these considerations, instead of labeling children's thoughts as right or wrong, childcare workers should keep in mind that there are times when it is necessary to guide children to awareness or give them hints for new awareness. In order to pick up the ideas that come from the child's mind and expand their interests further, the childcare worker is surprised by the child's thinking, but also thinks about how to help the child find it even more interesting. Assistance is needed to expand the scope of education.

Key-words

Thinking ability. Reading aloud. Consideration of teaching methods.

キーワード

思考力、読み聞かせ、指導方法の検討

I 研究の動機と目的

第3回こども未来戦略会議における小倉大臣の提出資料(2023)によると、3歳以上の幼児の多くは幼稚園・保育園・こども園などに通園し、集団生活の中で過ごしている。子どもたちは、各々が所属する施設における生活の営みの中や保育の活動を通して、表情、姿、行動や言葉で自分の思い、感じたこと、考えたこと、知っ

ていること等を発している。それらは、子どもたちの思いを知り、理解する上でとても重要な手段だと考える。

平成30年3月改訂の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、幼児期において育みたい資質・能力として三つを示しており、その中に「思考力・判断力・表現力などの基礎」

が挙げられた。また、この資質・能力は幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領のねらい及び内容に基づく活動全体によって育むことが示されている。

幼児が様々な体験を言葉で表現できるようになっていくためには、自分なりの表現が教師や友達、更には異なる年齢や地域の人々など、様々な人へと伝わる喜びと、自分の気付きや考えから新たなやり取りが生まれ、活動が共有されていく満足感を味わうようにすることが大切である。その喜びや満足感を基礎にして、幼児の言葉で表現しようとする意欲は更に高まっていく。そして相手にわかるように言葉で伝えようとすることで、自分の考えがまとまったり、深まったりするようになり、思考力の芽生えも培われていくのである¹⁾と書かれている。

そこで、子どもの思考力の芽生えを培う保育のヒントは、子どもの発する言葉から探ることが、一つの手段ではないかと考えた。但し、思考や言葉の発達には個人差があることや幼児期の特性も踏まえる必要がある。

本研究では、3歳児、4歳児、5歳児の思考力の芽生えを培う保育について、子ども達が発する言葉や表情を観察、分析、考察する。特に、それぞれの年齢において同じ活動を取り上げ、観察、分析することで、年齢における思考力の芽生えの発達を知ること、その上で、保育者の指導法を検討することを目的とする。

II 先行研究概観

保育用語辞典によると、思考とは、概念や表象を操作し、推論や判断や課題解決を行うというものごとの思いめぐらす活動であり、思考を知覚や記憶などの活動と合わせて「認知」と呼ぶ場合もある、と述べられている。思考の発達においては代表的な理論にピアジェ(Piaget,J)の理論がある一方で、思考の発達には社会的な相互作用が大きく関わっていることなどの知見があり、子どもの思考の発達は多面的にとらえる必要があるといえるとも述べられている。また何かに関心を持ち「何だろう」「どうしてだろう」と考える思考力の

芽生えは、乳児が周囲のものに関心をもち、触ったりなめたりと自分の体を使って試している段階からすでに始まっている。幼児期には、特に遊びを通して、周囲の身近な対象に好奇心をもって関わり、疑問を探求したり、やりたいことを実現するために試行錯誤したりするようになる。これが思考力の芽生えであり、このような具体的な活動のなかで自分なりに考えることが積み重なって、思考力となっていく。その過程では、子どもがじっくりと自分の興味・関心を深めるための時間や空間を保障すること、他者と言葉で考えや思いを伝え合う機会を大切にしていくこと、経験を絵などによって表現することなどの援助が重要である。

III 研究の方法

1, A保育所に在籍をしている3歳児15名、4歳児30名、5歳児28名それぞれの保育室へ同じ保育者が向向き「このあいだに なにがあった？」佐藤雅彦+ユーフラテス 福音館書店 かがくのとも 20102)の読み聞かせを行い、その様子を録画し、子どもたちが発する言葉や表情を記録する。

絵本の選定理由として、木村(2022)の研究より、科学絵本の可能性として、科学絵本が領域「環境」の内容に基づいた分類結果から「物の性質や仕組みに興味や関心をもつ、比べる、関連付ける」といった、科学的着眼の基礎となる項目の該当率が高く、幼児期の終わりまでに育って欲しい姿の「(6)思考力の芽生え」で示されている子どもの姿につながる活動の充実が期待できた」という結果に基づく。特に、ここで選定をした「このあいだに なにがあった？」は、見開きページにおいて写真と写真の間にスペースがある。子どもたちが写真を見て思いをめぐらし、考えたり想像したりする時間をもつことで、そこから出る表情、言葉が観察できるのではないかと考えたからである。本研究では、その中でも2場面を抜粋した。※場面1-1、1-2、2-1、2-2参照

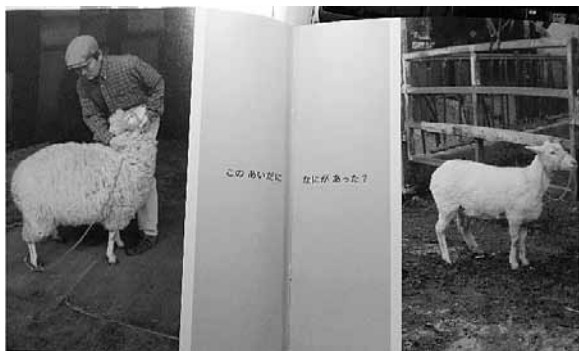
2, 記録を手掛かりとして、思考力の分析をし、保育者の関わり方、役割、子どもへの援助について考察を

行う。

IV 記録

1, 場面1 言葉、表情及び姿《場面1-1を見てから場面1-2を見る》

※場面1-1²⁾



※場面1-2

場面1-1の中央箇所（文字が書かれている）には、刈られた羊の毛が床一面に散らばっており、その羊の毛を場面1-1左側で羊の毛を刈っている男性が腰をかがめて集めている場面。

保育者は以下、保と表記し、子どもは全体を指す時は、子どもと表記し、個人を指す時はそれぞれアルファベットで表記する。

(1) 3歳児

保：「このあいだに なにがあった？」

本のタイトルを読み、ページをめくる。

本の場面1-1を開き、子どもに見せる。

子ども：絵本の写真を見る。

保：場面1-1向かって左側の写真を指さし「見て見て。この羊さん」次に右側の写真を指さし「この羊さん、なんか違うね」

A：挙手をする。「はい、はい」

保：「はい、Aさん」

A：「やぎさん、けがない」

保：「そうだね、こっちは」左側の写真を指さし「もこもこ、ふわふわしてるけど」

「こっちは」右側の写真を指さし「もこもこがないね」

A：挙手をする。「はい、はい」

保：「はい、Aさん」

A：左の写真を指さし「こっちはもこもこで」右の写真を指さし「こっちはもこもこじゃない」

保：「そうだね、じゃ、このあいだに なにがあったんだろうね。」保育者は場面1-1中央白い部分を指さした後、その箇所を指でぐるぐる丸を描きながら示す。「ここでなにをしたんだろうね」

B：挙手をする。「はい、はい、わかった。Bに聞いて」

保：「はい、Bさん、どうぞ」

B：「なんかちがう」

保：左の写真を指さし「この羊さんと」右の写真も指さし「この羊さん、なんかちがうね」

B：挙手をする。「はい、はい。」自分の頭を手でなでながら「ガリガリしたの」

保：「ガリガリ？ そっか、ガリガリしたのかな」

保：絵本のページをめくる。場面1-2を子どもに見せる。

保：「あ、見て。」保育者は場面1-2中央の写真を指さした後、その箇所を指でぐるぐる丸を描きながら示す。「ガリガリしてるね ここでガリガリしたから、羊さんはもこもこ、ふわふわのけがなくなって、つるつるになったんだね」「Bさん、あたり」

B：笑顔を見せる。

保：「かわったね」子どもに向かって言う。

C：にっこりと笑う。

(2) 4歳児

保：「このあいだになにがあった？」絵本のタイトルを読み、保育者は絵本の読み聞かせを始める。

A：「はい、はい」そう言いながら挙手をする。

保：Aの顔を見て、目を合わせる。目を絵本に戻す。「という絵本です。はじまり、はじまり」ページをめくり、場面1-1を子どもに示す。

保：左の写真を指さし「さて、おじさんが」と言う。

子ども：「わー」と声を挙げたり笑い合ったりする。

B：絵本の写真を見て「やぎさん」と言う。

保：「やぎさんかな、ひつじさんかな」右の写真を指

さす。「あれ、あれ？」驚いた表情で、絵本の写真を見る。

C：「きった」大きな声を発する。

D：「きった」「おじさんが、きった」

保：絵本のページ中央にある白い部分の「このあいだに なにがあった？」と書かれている部分を指でぐるぐる丸を描きながら示す。その後、中央の文が書いてあるところを指さし「このあいだに なにがあった？」と絵本にかかっていることを読む。

E：「おじさんがけをきった」

保：「このあいだに なにがあったかという」と

A：「はい」挙手をする。「おじさんがけをきった」

保：「はい、Eさん、どうぞ」

E：「おじさんがけをきった」

C、F、G、Hは、Eの方に顔を向け、話を聞く。その後、すぐに絵本の方に顔の向きを変える。

I、J：挙手をする。「はい、はい」

A：挙手をする。「はい、わかった」

保：ページをめくる。「おじさんがじよきじよきじよきじよき、じよきじよきじよきじよき けをきった あたり」と言って、Eの顔を見る。

E：笑って、右手でコブシを作りガッツポーズをより、Dに示す。

保：「このあいだに なにがあった？ という絵本なの」

(3) 5歳児

保：「このあいだに なにがあった？ はじまりはじまり」ページをめくる。

「このあいだに なにがあった？ いくよー」ページをめくり場面1-1を子どもに示す。

A：「あ、ひつじ」右手を前に伸ばして絵本を指さす。

B：「らくだ」

保：黙ったまま無言で左側の写真を指さして、示しながら子どもの顔を見回し、次に同じ様に無言で右の写真を指さし、子どもの顔を見回す。最後に中央の白い部分を指さす。「このあいだに なにがあった？」と中央に書かれている一文を読む。

C：「け」

D：「ひつじの、け」

A：「ふくになってる、それが」椅子から立ち上がり、自分の洋服の首元を両手でもち、顎に近づける仕草をしながら保育者に近づく。

保：絵本のページ中央にある白い部分を指でぐるぐる丸を描きながら「このあいだに なにがあった」絵本の一文を読む。「じゃん」と言いながら絵本のページをめくり、場面1-2を見せる。

E：「けをとった」

F：「けをとった」

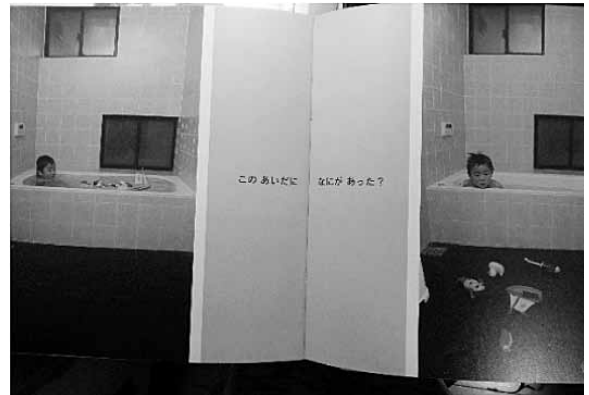
G：「けをとった」

H：「ひつじのけをとった」

保：子どもの言葉にうなづく。

2. 場面2 言葉、表情及び姿《場面2-1を見てから場面2-2を見る》

※場面2-1²⁾



※場面2-2

場面2-1の中央箇所（文字が書かれている）には、場面2-1の男児入浴場面の浴槽に、男性が入り、浴槽内のお湯が溢れて浮いていたおもちゃが浴槽からお湯と一緒に床に流れ出る場面。

(1) 3歳児

保：「おふろにはいつているおとこのこがいます」場面2-1向かって左の写真の指さす。

B：「あ、みて」絵本を指さす。

A：床にお尻をつけて座っている状態から立膝になり「はい、はい」と挙手をする。

保：「はい、Aさん」掌を上にして右手を伸ばし、どうぞの手差しをし「どうしたんでしょう」

A：「このおもちゃがはいっているのと、でているのがちがう」

保：「そう、そのとおり」右の写真を指さしながら「なんでおもちゃは、でちゃったんだろうね」

B：「じぶんでだした」

保：うなづく。

D：「ぼいってした」

保：うなづく。

A：「せまいから」

保：うなづく。

B：「はいって、つぎなげた」

保：うなづく。「こたえは」ページをめくり場面2-2を見せる。少し間をおいた後、中央の写真を指さしながら「おとうさんがおふろにはいってきました。ジャボン そうしたらおもちゃがぜんぶでちゃったね」と、笑う。

C：保の笑う様子を見て、一緒に笑う。

E：それまでの間、爪を口に当てながら見ていたが、手を口から離し、笑う。

保：「なげてなかったね、なげたとおもったよね」

F：絵本の中央写真に表れた男の人を指さして「なんかおっかい」

保：うなづく。「おっかいおとうさんがはいたら、おもちゃぜんぶでちゃったね」

B：うなづく。

F：床にお尻をつけて座っている状態から立膝になり「ねー、なんででちゃったの」と言う。

保：「なんででちゃったんだろうね、Fさん」と言う。

(2) 4歳児

保：「さあ、つぎ」ページをめくる。場面2-1を見せ左側の写真を指さす。

K：「はーい」と言って挙手をする。

D、L、C、Jも、Kに続いて挙手をする。

保：右の写真を指さしながら「あれ、おもちゃがぜんぶでちゃってる」場面2-1中央白い部分を指さした

後、その箇所を指でぐるぐる丸を描きながら「このあいだに」まで読む。

M、N、O：挙手をする。「はい」「はーい」

保：「なにがあったとおもう？」

E、G、L、P：挙手をする。「はーい」

保：「はいMさん」

M：「おもちゃをだした」

保：「おもちゃをだした。じゃ、ちがうふうにおもうひと？」

A、C、D、G、J、K、L、H、O、P、Q：挙手をする。「はーい」

保：「じゃ、Qさん」Qに向かって掌を上にして右手を伸ばし、どうぞの手差しをする

Q：「おもちゃがでちゃった」

保：「おもちゃがでちゃったよね、じゃ、なんででちゃったんだろうね」

A、C、D、O、L、P、H：挙手をする。「はーい」

R：両手で耳をふさぎ、その手を耳につけたりはずしたりする。

保：「Jさん」Jに向かって掌を上にして右手を伸ばし、どうぞの手差しをする。

J：「あのさ、それぞれあそんだらさ、それぞれあそんだら、おもちゃがでちゃった」

保：うなづきながら「おもちゃがでちゃった」

A、C、L、O、P：挙手をする。「はーい」

R：両手で耳をふさぎ、その手を耳につけたりはずしたりする。

保：「では、さいごね、Pさん」

P：「えー、いっきにひとがおふろにはいってきて、バシャッとでて、おもちゃがでちゃった」

保：「ひとがはいって」「では、せいかいは」ページをめくる。場面2-2を見せて「じゃん」と言う。

E：大きな声で「わー」と言う。

保：左の写真を指さしながら「おもちゃははいっているけど」と言った後、中央の写真を指さしながら「あー、おとうさんがはいたら」右の写真を指さしながら「おもちゃがでちゃった」口に手をあてて笑う。

A、H、P、Sも口に手をあてて笑う。

保：「Pさん、あたり すごいね、よくわかったね」

P：うなづく

A：「わかったよ」

J：「ぼくもわかったよ」

Q：「だしたとおもった」

保：うなづく「ね、だしたとおもったよね」

Q：「せんせい、これみたことあるかも」

保：「みたことあるかも？そう じゃつぎはむずかしいかも」

E：挙手をする。

(3) 5歳児

保：ページをめくり場面2-1を見せ、黙ったまま左側の写真を指さして、示しながら子どもの顔を見回す。次に同じ様に無言で右の写真を指さし、示しながら子どもの顔を見回す。最後に中央の白い部分を指さす。「このあいだに なにがあった？」と中央に書かれている一文を読む。

E：「おもちゃがあったのに、なくなった」

H：「おもちゃ かたづけた」

I：絵本に向かって右手を伸ばし、指さしながら「おもちゃかたづけた」

J：「おもちゃ かたづけた」

K：掌を下に向け、伸ばした両手を上から下におろす仕草をしながら「おもちゃがでちゃった」

保：ページの中央、白い所を指さし「このあいだに なにがあったとおもう？」

H：絵本に向かって右手を伸ばし、指さしながら「あ、おもちゃかたづけた」

保：「おもちゃ かたづけた」

L：「おもちゃかたづけた」独り言のように、小さい声でつぶやく。

保：「おもちゃ かたづけたのかな？」

G：首をかしげる。

M：「たぶん」

保：「ほかには？」

I：絵本に向かって左手を伸ばし、指さしながら「お風呂にはいつてるのに」と言う。

K：絵本に向かって、右手を伸ばし、指さしながら、左手も前に伸ばし右手と同じ高さに上げたまま「おゆがちがくなってる」

保：「あ、(右側の写真に目を向けながら) おゆがすくなくなってるね」

A：「おもちゃが、おちてる」「おもちゃが」と言って、両手を前に伸ばし、掌を上に向ける。

その直後に「おちちゃってる」と言って、掌を下に向けて両手を下げる。

保：「なにがあったから、おもちゃが」

H：右手を伸ばし、絵本の写真を指さしながら「おもちゃも かわったしさ」

保：「うん」うなづく。

H：「あのさ、なんか、なんか」

I：「ザブンって」

保：「え、ザブンって？ ザブンってしたの？」

I：うなづく。

保：「だれが？」

M：右手を伸ばし、絵本の写真を指さしながら「このおとこのこが」

A：Mを見た後、右手を伸ばし絵本を指さしながら「あのおとこのこ」

M：両掌を下に向け、伸ばした両手を上から下におろす仕草をしながら「ザブンって」

A：(Mを見た後、両手を前に伸ばし、下におろしながら)「ザブンって」

J：左手で挙手をし「あ、わかった。おもいからさ」と掌を下に向けておろす仕草をする。そして続けて「あのおふろにはいると うえになるけどさ」と言って左掌を上に向けて、上に持ち上げる仕草をする。

E：「あふれた？」

J：「えっとさ、おもちゃ できるとき」左手を下におろす仕草をしながら「したになる」

A：「ジャンプした」

保：「ジャンプした？ このこが？ ジャンプしたらおもちゃがでたのかな？」「では」と言って、ページをめくり、場面2-2を見せる。

K：右手を伸ばし、絵本の写真を指さしながら「あ、

だれかもうひとり、すわってる」

保：「ふふふ」と笑い、中央の写真を指さし、このあいだに こんなことがあったんだって」

N：「ひとがふたり、はいってる」

B：「え、なんでひとがはいってるの？」

保：「ひとが、はいったら」

K：右手を伸ばし、絵本の写真を指さしながら「おもちゃがでちゃったり、おふろのみずが」右手を下におろしながら「あふれたりした」

保：「そうなんだって」

V 分析

場面1-1は、2枚の写真が左右に並んでおり、その中央は白い背景で「このあいだに なにがあった？」と書かれている。左の写真と右の写真の間、白い背景の場面で、どんなことがあったのか思いを巡らせる子どもの姿を観察した。3歳児はその場面を目にした時、しばらく黙って見ていた。保育者は左右の羊の違いについて、子ども達に尋ねると「毛がない」「(左は) もこもこだけど、(右は) もこもこじゃない」と考えを伝えている。「このあいだで なにがあった？」を考えるのは、その次の段階で、始めは左右の写真の違いに気付くことが3歳児の最初の思考であったと捉えることができた。

3歳児の思考（場面1）

① 保：絵本の場面を見せる
子：場面を見る
思考：見て、目から得た情報を取り入れる

② 保：「この羊さんとこの羊さん、なんか違うね」
子：「毛がない」
思考：2枚の写真の違いを捉え、言葉で伝える

③ 保：ここで、なにをしたんだらうね
子：「ガリガリしたの」
思考：どうして羊の毛が無くなったのか、何をするとなくなるのか、思いを巡らし考えを伝える

③では左右の写真の違いがわかったところで、保育者は「このあいだに なにがあった？」という尋ね方をする一方で、「ここでなにをしたんだらうね」と子ども達に尋ねた。すると「ガリガリしたの」という言葉の表出があった。羊には毛があった。人が傍にいた。その羊の毛が無くなった。つまり、毛を切った、刈ったという所に子どもの思いが行きついた様子が窺える。場面1-2を見て、中央の写真で人が羊の毛を刈っている写真を見て、写真で「ガリガリ」していることを確認し、ホッとしたような嬉しそうな表情が見られた。

このようなストーリーで進んでいく形の絵本を見る経験が初めてだったことも、言葉の表出に時間を要した理由だと考えることができる。それは、場面2を見た時に「なにがあったか」という思いを言葉に表す時間が場面1よりも短くなっていることから推察できる。子ども達は写真の違いを当てる、ということにも楽しみや喜びを見出しており「当たり」と言われたことで「当たって嬉しい」と感じ、次はどんなクイズ、問題がでるのだろうかと期待に繋がっている様子が見受けられた。「あたり」「はずれ」で遊ぶ活動の経験があり、このような姿が見られるのではないかと推察する。

場面2については、場面1よりも自分たちの日常生活に近い題材（風呂、玩具）であったこともあり、身近に感じていた様子が言葉の表出の多さに表れている。

3歳児の思考（場面2）

① 保：絵本の場面を見せる
子：場面を見る
思考：見て、目から得た情報を取り入れる

② 保：「あ、みて」
子：「はい、はい」
「おもちゃがはいっているのと、でてるのがちがう」
思考：2枚の写真の違いを捉え、言葉で伝える

③ 保 : 「なんでおもちゃはでちゃったんだろうね
 子 : 「じぶんででした」
 「ほいってした」
 「せまいから」
 「はいって、つぎなげた」
 思考: なぜおもちゃがでたのか、思いを巡らし、自分の考えを言葉で伝える

④ 子 : 「なんかおっきい」
 思考: 「なにがあった？」ということ以外の情報を写真から得て、言葉で伝えている

③の「なんでおもちゃはでちゃったんだろうね」の問いに、子どもがそれぞれ自分の言葉で伝えようとしている所に着目したい。友だちの言葉を真似るのではなく、自分が思ったことをそのまま言葉にすることができた。そう捉えることができる半面、友だちの意見を聞くという様子が見受けられなかったとも受け取れた。また、ここで特徴的なのは「このあいだに なにがあった？」という結果への着目にこだわらず、それ以外の情報を写真から得ることができ、それを言葉で表している姿である。「なんかおっきい」人がお風呂に入ったことで、おもちゃがでた、という着眼点からの思考は「もしかしたら、大きい人が入ると、おもちゃは外に出るのかもしれない」という気付きに、つながるのかもしれない。

4歳児での読み聞かせでは、絵本のタイトルを読んだ直後に「はい、はい」と手を挙げる子どもがいた。挙手については、3歳児での読み聞かせでも見られた姿であるが、4歳児は絵本のタイトルが質問形式で、問いかけの形になっていることから、何かを聞かれている、質問をされているのだと考え、挙手をして答えようとしているように捉えることができる。タイトルをよく聞き、すぐに返答しようとする姿が見られた。

4歳児の思考(場面1)

① 保 : 絵本のタイトルを言う
 子 : 表紙を見て、タイトルを聞く、挙手をする
 思考: 見て聞いて、目と耳から得た情報を取り入れる。質問に形式の言葉に答えようとする

② 保 : 絵本の場面1-1を見せる。
 「あれ、あれ？」
 子 : C「きった」
 D「きった」
 「おじさんが、きった」
 E「おじさんがけをきった」
 思考: 2枚の写真の違いを捉え、言葉で伝える。
 3人目の子どもは「おじさんが」きったと思い、言葉を加える。4人目の子どもは「けを」きったと思い、言葉を加える。

③ 保 : 「このあいだに なにがあった？」
 子 : 「おじさんがけをきった」
 思考: 絵本のタイトルである問いに対し、3人目の子どもが自分の思いを言葉で伝える。

②ではCが「きった」と言った後、Dが「きった」と同じ言葉を繰り返している。そしてDはその直後にすぐ「おじさんがきった」と言っている。Dは他児が言った言葉を繰り返し、更に情報を追加して言葉を加えて伝えている。更にEは、Cが言った「きった」の言葉、そしてDが言った「きった」「おじさんがきった」を傍で聞いており、その言葉に「けを」という所を自分で加え「おじさんがけをきった」という言葉を発した。子ども達は、他児の声を聞きながら、自分で更に絵本の写真から情報を収集し、自分の気付いたこと、思考を言葉の中に取り入れていることが読み取れる。

場面2-1では、場面1での経験があったことから、場面1の時より挙手をする子どもの数が増えている。「こ

うすればいいんだ」「考えて、自分の思ったことを話せばいいんだ」ということがわかった姿が伺える。

4歳児の思考（場面2）

① 保：「さあ、つぎ」場面2-1を見せる
子：挙手をする
思考：質問に形式の言葉に答えようとする

② 保：「あれ、おもちゃがぜんぶでちゃってる」「このあいだに なにがあったとおもう？」
子：挙手をする
M「おもちゃをだした」
Q「おもちゃがでちゃった」
J「あのさ、それぞれあそんだらさ、それぞれあそんだら、おもちゃがでちゃった」
P「えー、いっきにひとがおふろには行ってきて、バシッとでて、おもちゃがでちゃった」
思考：自分が思ったことを答えようと手を挙げる。Qは、Mの言葉を聞き、自分の言葉で伝える。JもQの言葉を受け、自分の言葉で伝える。Pは自分の思いを言葉で伝える。

場面2-1を見て「このあいだに なにがあった？」を考える4歳児は、場面1同様、他児の意見も聞きつつ、それを自分の言葉で思いを伝えようとしている。それぞれの発する言葉が違うことにも着目したい。②の最後にPの考えを聞いた他児から、言葉の反応はなかった。正解が出たことに驚いたが、題材が身近であることから、経験があるのかもしれないということも予測される。Pの中の経験が場面2-1と結びつき、思いめぐらせ考え言葉が出たのではないかと考える。

5歳児は「このあいだに なにがあった？」とタイトルを読み、そのまま場面1へと話を進めることができた。ストーリーが理解できていると考える。

5歳児の思考（場面1）

① 保：「このあいだに なにがあった？はじまり、はじまり」場面1-1を見せる
子：「あ、ひつじ」
「け」
「ひつじの、け」
「ふくになってる」
思考：目から得た情報を言葉で表す。羊の毛が無くなったことに気付き、それを伝えようとする。羊の毛が服に使われていることに気付き、それを伝えている。

② 保：「このあいだに なにがあった？」白い背景の中央部分の一文を読み、ページをめくる。場面1-2を見せる。
子：E「けをとった」
F「けをとった」
G「けをとった」
H「ひつじのけをとった」
思考：場面1-2の中央の写真を見て、気付いたことを言葉で伝える。E、F、Gは続けて順々に目で見えた情報を言葉で伝える。HはE、F、Gの言葉を聞き、自分の得た情報を加えて言葉で伝えている。

①で場面1-1を示した時に、羊の毛に変化があったことがわかっている様子が窺えた。保育者が絵本に書いている以外の言葉を発しなくても、②の場面1-2を見た時に、場面1-1では背景が白かった中央に、新たに写真が加わったことにより、羊の毛を刈っている情報を得て「けをとった」ことに気付き、「そうか」「わかった」という面持ちで、答えている姿が見て取れた。

場面2について、5歳児の特徴として他年齢の子どもと顕著な違いがみられたのは、お風呂のお湯の増減に着目をした思考であった。

5歳児の思考（場面2）

① 保：場面2-1を見せる「このあいだにな
 にながあった？」
 子：「おもちゃがあったのに、なくなった」
 H、I、J、K「おもちゃ、かたづけた」
 思考：お風呂の中のおもちゃを見て、気付い
 たことを言葉にしている。
 Hが発した言葉を聞き、同じ言葉を発
 している

② 保：「おもちゃかたづけたのかな？」
 「ほかには？」
 子：K「おゆがちがくなってる」。
 A「おもちゃが、おちてる」
 I「ザブンって」
 J「あ、わかった。おもいからさ」
 「あのおふろにはいるとうえになるけ
 どさ」
 E「あふれた？」
 J「えっとさ、おもちゃでるとき」
 「したになる」
 A「ジャンプした」
 思考：左右の写真のお風呂のお湯の量の違い
 に気付く。風呂の湯がザブンと揺れると、おも
 ちゃが落ちると思った。重い
 ものが入ると湯が上に上がることに気
 付くJの言葉を受け、湯が上に上がると
 風呂から湯があふれることに気付く。
 おもちゃが出た後に、湯が下に下がっ
 ていることに気付く。湯の中でジャン
 プすると、湯が揺れることに気付く。

③ 保：「では」ページをめくり、場面2-2を示
 す
 子：「あ、だれかもうひとりすわってる」
 「ひとがふたりはいつてる」
 「え、なんでひとがはいつてるの？」
 「おもちゃがでちゃったり、おふろのみ

ずがあふれたりした」

思考：場面2-1で出ていなかった中央の写真
 を見て、人が増えていることに気付く。
 なぜ、人がはいつているのか不思議に
 思っている。人が入ったことで、風呂
 の湯が増え、風呂からあふれたことに
 気付く

①で「おもちゃかたづけた」という言葉が続けて出
 てきた。②で「ほかには？」という問いを投げかけると、
 Kからお湯の量の違いに着目した言葉が出た。続いて
 Jは重いものが入ると、湯は上に上がることに気付
 いてそれを言葉で伝えると、Eから「あふれた？」と
 いう言葉が出た。「あふれた」という言葉から「おも
 ちゃでるとしたになる」と風呂のお湯が風呂からあ
 ふれたこととおもちゃも一緒に出たのかもしれないこと
 やおもちゃが出た後は湯がまた少なくなっていること
 にも気付くことができた。またそこではAが「ジャン
 プをした」と考え、ジャンプをすると湯が揺れること
 に気付くこともできている。③で場面2-2を示すと、
 別の人が現れ風呂に入っていることに驚きながらも、
 保育者が話す前に、Kは人が入ることで「おもちゃが
 ちゃったり、おふろのみずがあふれたりした」と自分
 の言葉で自分の考えを言葉で伝えることができていた。

VI 考察

3歳児の観察記録の分析から、3歳児は1枚目の写
 真(左の写真)と3枚目の写真(右の写真)を比較し、各々
 の写真の間(背景が白い場面)で何が起こったのかを
 連続したストーリーとして捉えることは困難であった
 と考える。しかし、場面1では1枚目の写真と3枚目
 の写真の違いから、3歳児なりに思いをめぐらせ「ガ
 リガリした(刈った)から」と考えることができ、そ
 れを言葉に表すことができた。場面2は場面1同様に
 写真の違いはわかるが、大きな別の人がお風呂に入
 ってきて、なぜおもちゃが外に出てしまったのか、とい
 う種明かしの内容よりも「なんかおっきい」と人の観
 察をすることを楽しんでいたように捉えられることか

ら、3歳児は絵本を見る中で、場面そのものを見て、思いを巡らせたり、気付いたりすることを楽しんでい
るのではないかと考える。

4歳児の観察記録の分析からは、場面1において「このあいだに なにがあった？」という問いに対し、「けをきった」と考えを表し、ストーリーの仕組みを理解できていたことがわかった。更に言葉はそこでとどまらず「きった」が「おじさんがきった」に変わり、「おじさんがけをきった」というように少しずつ「なにがあった？」を表す言葉が子ども同士の言葉のやり取りから増えていったことに着目したい。考えを言葉に表す方法が具体化されている。一人で考え、言葉に表すこともできたにちがいないが、ここでは5人の子ども達がやり取りに関わっている。お互いの言葉を耳にし、更にその言葉に自分の考えた言葉を添えて、言葉が思いにどんどん近づいていると考える。また場面2では、自分の考えを迷わず言葉にして伝える姿が特徴的であった。同じ考えを言葉にしているが、言葉は同じものは一つとしてなく、自分の言葉で表していた。最後に「このあいだに なにがあった？」をほぼ言い当てた子どもがいたが、思いをめぐらし、皆とは全く違う考えでありながら、それを素直に言葉で言い表すことができた。言葉によってその子が場面を見て、どんなことを考えていたのか、理解ができることの嬉しさ、驚きと楽しさを感じることができたと考ええる。

5歳児の観察記録の分析で、最も思考について顕著に表れたのが場面2で発せられた言葉であった。2枚の写真を見て「おゆがちがくなってる」とお湯の量の違いに気付き「おもいからさ」「おふろにはいるとうえになるけどさ」と、重いものがお風呂に入るとお湯が上に上がることも考えている。そこからお湯が「あふれた？」と言葉が続き、「おもちゃでるとさ」お湯が「したになる」ことにも気付いている。種明かしを見て、人がお風呂に入ると「おもちゃがでちゃったり、おふろのみずがあふれたりした」とジェスチャーを交えながら考えたこと、思いを言葉で言い表すことができた。どうしてそうなったのかを写真をヒントにしながらかえ、その考えを友達の言葉も聞きながら、膨らませ「だ

からこうなったんだ」と結論まで言葉で表すことができた所は、非常に興味深いと考える。

3歳児、4歳児、5歳児の思考力の発達の芽生えとして見られる姿に添った保育者の指導法は、とても重要になると考える。

VII 指導方法の検討

1名の保育者が、3歳児、4歳児、5歳児それぞれの保育室にて同様の絵本の読み聞かせを行った。子どもと保育者間での言葉や表情のやり取りの様子を観察記録から分析した通り、年齢と共に、子どもたちが思いめぐらしながら思考を言葉や表現で伝え合う様子や友だちや保育者に伝わった時の喜びを味わう姿が見られた。

保育者は、読み聞かせの際に大げさに抑揚をつけすぎること自身を主体となることを避け、絵本の世界と子どもたちとを繋ぐパイプ役であることに徹し、保育者の表現が大きく印象に残らないように配慮をした。

また、子どもたちが思いめぐらすために「間」を大切にした。その際、保育者の表情で子どもたちの感情の変化に影響がでないように、声のトーン以上に留意し、保育者自身の感想や解説をせず、「間」に発生する子どもたちから出る言葉や非言語を否定せず、丁寧に受け止めた。

本研究5歳児場面2では「おもちゃかたづけた」と言葉が出たが、「片付けた」というよりは、床に散らかってしまったような場面にも捉えられる。

しかし、その第一声を発した子どもがクラスのリーダー的存在であったことから、「正しい」「少し違って」を感じる前に「その子が言ったならきっとそうだ」というような影響が他児を左右することもあり得る。集団の中で子ども同士、影響を受け合うことも、子ども達にとって思考の芽生え、発達における経験になっていると考えられることから、思考に他児の影響も大きい。

子どもの思いに、正しい、正しくない、と白黒をつけるのではなく、保育者の指導は、気付きに導くことや新しい気付きのヒントを与えるが必要な時もある。

ることに留意すべきである。

子どもの中から出てきた発想を取り上げ、それらをその後更に興味関心を広げられるよう、保育者も子どもの思考に驚きながらも、どう援助すれば更に面白いと思えるようになるか等、思考の幅を広げる援助が必要である。

また、子どもは保育者や他児との集団での関わりから数えきれないほどの新しい「言葉」や「表現」に出合いながら思考力を育てている。保育者の立居振る舞いや表情、言葉遣いにも十分に留意したいものである。

VIII まとめと今後の課題

本研究では、科学絵本を用いて幼児期の終わりまでに育って欲しい姿の「(6)思考力の芽生え」で示されている子どもの姿（「物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる」「友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる」）につながる活動の充実が期待できた」という結果を3歳児、4歳児、5歳児の発する言葉や表情からそれぞれの特徴を捉え、示すことができた。そして多くの子どもが生活をする集団の中で、同年齢の友だちや保育者と共に思考力を育む姿を改めて認識することができた。幼稚園教育要領解説には、幼児期の思考力の芽生えは、小学校生活へ主体的に関わることにつながること、また考えたり試したりする経験は、主体的に問題を解決する態度へとつながる、とある。今後は思考力の芽生えと主体性との関係について、実践事例を通して考えていきたい。

《引用文献》

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」2018 216頁
- 2) 佐藤雅彦+ユーフラテス「このあいだに なにがあった？」福音館書店 かがくのとも 2010 2～3頁・20～21頁 ※見開き2頁2画面まで転載許可取得

《参考文献》

- 小倉將信「第3回こども未来戦略会議におけるの提出資料」2023
- 木村優里「幼児期の科学教育における科学絵本に関する基礎的研究 - 幼稚園教育要領の領域「環境」との関りに着目して-」科学教育研究 Vol.46 No.4 2022
- 森上史朗 柏女霊峰 「保育用語辞典」ミネルヴァ書房2017
- 長澤貴「乳幼児期の言葉の発達と領域「言葉」の指導法についての考察—ヴィゴツキーの発達論を手掛かりに—」鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編(5)2022
- 伊崎一夫「乳幼児期の言葉の発達と思考力の育成 (1) —幼児教育の連続と発展—」奈良学園大学紀要(8) 2018
- 滝沢武久「子どもの思考力」岩波新書1984
- 杉田美穂 小野塚若菜 ベネッセ教育総合研究所「遊びのなかの言葉をてがかりにした5歳児の思考力発揮の分析」日本保育学会第76回大会 2023
- 厚生労働省「保育所保育指針解説」2018
- 文部科学省「幼稚園教育要領解説」2018